

新年を寿ぐ吉祥のデザイン

2016年

1月9日〔土〕— 2月14日〔日〕

Auspicious Designs

in Celebration of the New Year

【休館日】月曜日、ただし1月11日〔月〕祝は開館、翌1月12日〔火〕休館

コレクション展



正月の街中には松竹梅の飾りと意匠があふれています。

松と竹と梅とを組み合わせて、祝儀のデザインとして用いるようになったのは、室町時代以後のことです。寒い季節に耐える松・竹・梅を歳寒三友として愛した、中国の文人たちの思想がもたらされた結果でした。しかし、松・竹・梅は、それよりもっと古くから日本人の文化や生活にかかわってきました。

門松は、もともと正月の歳神が祭場に降臨するための依代として立てられたものです。松の風格ある幹や枝ぶり、常に緑深い葉などに、ひとびとは神秘的な力を感じ取ったのでしょう。兼好法師は「家にありたき木」として松を第一にあげています。

また、かぐや姫誕生の場面や、七夕かぎりからも連想されるように、青々とまっすぐで、凜とした姿の竹にも、霊性があると考えられました。

梅は、8世紀ごろ中国文化とともに入ってきた、この中では一番新しい樹木です。花のない時期に、老木から生命が再生するように可憐な花を咲かせるさまは、それ自体、不可思議な力を感じさせます。

この展覧会は、松・竹・梅を単独に、あるいは組み合わせで描いた絵画や、それらをデザインした工芸品を展示しています。それぞれの作品に込められた、長寿の願いや祝意、あるいは松・竹・梅の霊性に対する人々の畏敬の念を感じ取っていただければ幸いです。

根津美術館
NEZUMUSEUM



しょうちくばい
展示室1 松竹梅

—新年を寿ぐ吉祥のデザイン—



しょうかくずびょうぶ
松鶴図屏風 6曲1双 紙本着色 日本・桃山時代 17世紀 根津美術館蔵

いわゆる四季花鳥図には、松の大木を描いたものが多い。冬枯れの時期に青々とした葉をつける松に、人々は強い生命力を感じ、長寿を連想したのだろう。この屏風には、さらに鶴3羽が加えられ、祝意が込められている。



ぞめつけいろあしやまづめずしんなりがま
染付色絵松竹梅文皿
肥前 鍋島藩窯 1枚 施釉磁器
日本・江戸時代
17世紀
根津美術館蔵
山本正之氏寄贈



重要文化財
あしやまづめずしんなりがま
芦屋松梅図真形釜
おおえのりひで
大江宣秀作 1口 鉄
日本・室町時代
永正14年(1517)
根津美術館蔵

重なりあう三つの円の内側に、緑と赤を用いて松竹梅を描き、その外側には染付で細密な毘沙門亀甲文を敷き詰めている。鍋島の高いデザイン力と技術力が存分に発揮された、いかにも、祝いの膳にふさわしい器である。

茶釜の二大産地のひとつ、芦屋(福岡県)の代表的な作品。端正な姿や、側面にみられる松梅文の絵画的な表現は、芦屋釜の特徴とされる。



べにじしょうちくばいもんふりそで
紅地松竹梅文振袖
1領 絹
日本・江戸時代
19世紀
根津美術館蔵

こまつひきず れいぜいためたか
小松引図 冷泉為恭筆
1幅 絹本着色
日本・江戸時代
19世紀
根津美術館蔵

小松引は、平安時代、正月最初の子の日に、小松を引き抜いて長寿を願った遊び。冷泉為恭(1823~64)は王朝風俗を好んで描いた。



絹地を指先で小さくつまみ、そこを糸で括って染める鹿子絞りを全面に施し、松竹梅と鶴の文様を伸びやかにあらわしている。



ぞめつけいろえいわたけもんさら
染付色絵岩竹文皿
肥前 鍋島藩窯 4枚 施釉磁器
日本・江戸時代
17-18世紀
根津美術館蔵

笹竹と、観賞用の岩として古くから珍重される太湖石が大きく描かれた五寸皿。生命力溢れる竹と神秘的な岩の対比が魅力である。

同時開催

展示室2 のうしょうぞく 華麗なる能装束

能は、江戸時代に大名の公式行事となったため、色系や金糸を用いた華麗な能装束が発達しました。館藏品より江戸時代の優品約10点を展観します。



しろじせいがいはおうぎもんぬいはく
白地青海波扇文縫箔
1領 絹
日本・江戸時代
17世紀
根津美術館蔵

四季の草花を刺繍した扇形を全面に散らし、余白には同心円を連ねた青海波文を、金箔を貼り付けてあらわす。清々しい意匠の優品。



べにうすはなだんでっせんからくさもんからおり
紅薄縹段鉄線唐草文唐織
1領 絹
日本・江戸時代
18世紀
根津美術館蔵

紅と薄い縹色を段替わりに染めた絹地の全面に、鉄線の花と唐草文を華やかに織り出している。唐織は、主に女性役が表着として用いる。

展示室5 ひやくちんず 百椿図

江戸時代のはじめ、空前の椿園芸ブームのなかで制作された「百椿図」。新春恒例となった展示をお楽しみください。



ひやくちんず かのうさんらく
百椿図(部分) 伝狩野山楽筆 2巻
紙本着色 日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵 茂木克己氏寄贈

100種類以上の椿を、さまざまな器物と組み合わせて描くのが「百椿図」の特徴です。現代のフラワーアレンジメントの趣です。

展示室6 しょげつ 初月の茶会

新年の始まりを茶会で寿ぎます。平成28年の干支「猿」や、歌会始のお題「人」など新春にまつわる茶道具約20件の取り合わせ。



いろあわすびふみちちやわん ののむらにんせい
色絵結文茶碗 野々村仁清作
1口 施釉陶器
日本・江戸時代 17世紀 根津美術館蔵

細く折られた文を千代結びにした「結び文」は吉祥文のひとつ。赤絵と青絵、金彩が用いられた仁清らしい華やかな茶碗である。

さるまいず かつしかたいと
猿舞図 葛飾戴斗筆
1幅 紙本淡彩
日本・江戸時代 19世紀
根津美術館蔵



干支にちなんで、北斎の門人葛飾戴斗が描く猿舞図の軸を掛ける。猿は魔が「さる」といって縁起のよい画題として好まれた。

関連プログラム

- | 講演会 「松竹梅の美術」
日時 1月30日(土) 午後2時～3時30分
講師 松原 茂 (当館 学芸部長)
会場 根津美術館講堂 (定員 130名)
- (申込方法) 往復葉書の往信裏に、展覧会名・住所・氏名(返信表面にも)・電話番号をご記入うえ、〒107-0062 東京都港区南青山6-5-1 根津美術館 講演会係宛にお申込みください。
*1月16日(土)締切(当日消印有効)。
*参加希望者1名1講演会につき、1枚の往復はがきでお申込みください。
- | スライドレクチャー 日時 1月15日(金) 「百椿図」 野口 剛 (当館 学芸第二課長)
1月22日(金) 「松竹梅」 松原 茂 (当館 学芸部長)
午後1時30分から約45分間
*会場はいずれも根津美術館講堂 (先着 130名)。学芸員がスライドを用いて説明いたします。
- | ギャラリートーク 日時 2月 5日(金) 「展示室2 華麗なる能装束」 午前11時から約40分
*事前申し込みは不要。午前10時より美術館受付にて整理券を配布いたします(お1人につき1枚)。ご希望の方はお申し出ください。(先着35名) 開始10分前に、整理券をお持ちのうえ、ホール階段下へお集まりください。

※講演会、スライドレクチャー、ギャラリートークとも聴講は無料ですが入館料をお支払いください。

開催概要

- 【展覧会名】 コレクション展「松竹梅 —新年を寿ぐ吉祥のデザイナー—」
【主 催】 根津美術館
【開催期間】 2016年1月9日(土)～2月14日(日)
【開館時間】 午前10時～午後5時 [入館は午後4時30分まで]
【休 館 日】 毎週月曜日、ただし1月11日(月・祝)は開館し、翌1月12日(火)は休館。
【入 館 料】 一般1000円(800円) 学生800円(600円)
*()内は20名以上の団体料金、中学生以下無料
【前 売 券】 一般900円 学生700円
2015年11月14日(土)～12月23日(水・祝)「物語をえがく —王朝文学からお伽草子まで—」展開催期間中、根津美術館ミュージアムショップにて販売
【ア ク セ ス】 地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線(表参道)駅下車 A5出口(階段)より徒歩8分、B4出口(階段とエスカレーター)より徒歩10分、B3出口(エレベーターまたはエスカレーター)より徒歩10分
【住 所】 〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1
【お 問 合 せ】 TEL 03-3400-2536 (代表)
【ホームページ】 <http://www.nezu-muse.or.jp> (日本語・English)

次回展



重要文化財 金剛界八十一尊曼荼羅(部分)
日本・鎌倉時代 13世紀 根津美術館蔵

ほとけの教え、とこしえに。—仏教絵画名品展—

2016年 2月27日(土)～3月31日(木)

仏伝図から曼荼羅、垂迹画まで、根津美術館が誇る仏教絵画コレクションをご鑑賞ください

【リリース・広報のお問合せ】

担当: 所、村岡、羽田 tel. 03-3400-2538 (直) fax. 03-3400-2436 e-mail. press@nezu-muse.or.jp